**北津　青介 （きたづ・せいすけ）**

**１、プロフィール**

劇作家。劇団「雪の会」代表。津軽弁による作品「お前は輝ぐ虹だべが」はツガルミュ－ジカルスとして注目された。青森放送社員としてラジオの連作番組も企画した。

＜生没＞

1933（昭和８）年４月１日 ～ 1973（昭和48）年10月10日

＜代表作＞

遺稿集『秋に蒔いだ種コ』「茜雲の下の客人」「死神の心得」「くるみに頬寄せて」「幽霊というものは」

＜青森との関わり＞

青森市に生まれる。本名工藤迪、新制の青森高校第２回生。在学中より俳句ほか文芸作品を書く。「欅」を主宰。

**２、作家解説**

本名は工藤迪（すすむ）。青森市大字大野字長島67番地に父哲郎、母ヒサの長男、独りっ子として生まれた。昭和21年青森県立青森中学校に入学。学制改革で24年、青森高等学校に入学。第２回生として卒業したのが27年３月であった。２年後輩に寺山修司がおり、寺山は「牧羊神」を、迪は「欅」を主宰していた。昭和27年春、早稲田大学文学部に入学、俳句研究会に入る。昭和28年、市ヶ谷の三木トリロ－冗談音楽事務所に出入りし、永六輔と知り合う。この頃から「北津青介」のペンネ－ムを使いはじめる。この間に句集「脈翅子（やご）」を出し、早大合同句集「稲城」、青森県句集第14集（昭27）にも出句する。帰青してラジオ青森（現青森放送）に入社。東京時代の昭和30年劇団「雪の会」が誕生し、文芸部門に永六輔、海郷三吉、北津、篠崎淳之介ら、音楽部門には川崎祥悦、村木由夫ら、美術部門には川内直哉、高木保など多くの仲間が集まった。第１回の旗揚げ公演は昭和31年１月青森県立図書館ホ－ルで行われた。演目は「爺ちゃ婆ちゃお晩です」。

同じ年の７月「四つの夢の物語」「夕焼けの唄・七幕」。その後昭和36年まで15回の公演を続け、この年米谷ケイ子と結婚、翌37年長女千夏が誕生する。昭和38年第16回公演「お前は輝く虹だべが」は津軽弁によるツガルミュ－ジカルスとして全国的に注目を集めた。昭和41年第18回公演「雲吉にボロ菊の花咲けば・五幕」昭和42年第20回公演「おらだぢに海のある限り」は篠崎淳之介との共作。昭和43年９月、第21回公演のツガルロマンテ－ク「陽炎の唄は遥かなれども」を企画・制作し、青森市油川出身のレビュ－作家菊谷栄における人間と運命を描き、榎本健一を特別出演させた。またラジオの世界でも青森放送社員として退職まで約800本の番組を制作、39年の「幻の鳥善知鳥への詩劇とりふぶき」は民放祭で初めて金賞をもたらした作品である。昭和47年ＡＴプランの「キャロット」編集長として地方ＰＲ誌に新機軸を出した。昭和48年10月10日急逝。享年40歳。

**３、資料紹介**

〇『秋に蒔いだ種コ』

図書

1974（昭和49）年10月10日

195mm×132mm

父であり俳人でもあった工藤哲郎（俳号汀翠）が供養のために出版した。俳句・詩・戯曲の三部門に分かれている。書名は収載された戯曲の題名からとられた。長部日出雄、寺山修司、篠崎淳之介、永六輔ほかの序文がある。

〇「秋に蒔いだ種コ」プログラム

印刷資料（プログラム）

1972（昭和47）年３月21日

250mm×362mm

ツガルミュ－ジカルス以来３年ぶりに第１回雪の小劇場として作者が演出。主題歌の作曲は天井桟敷のスタッフで「時には母のない子のように」などのユニ－クな作風で知られる田中未知さんによるものであった。青森教育会館で上演された。

〇資料冊「北のすていじ」雪の会４０年史

図書

1997（平成７）年３月31日

210mm×145mm

劇団雪の会によって編集、発行された。カバ－裏面に三木鶏郎の祝文、装幀は高木保。雪の会創立会員で劇作家、演出家の篠崎淳之介が「資料冊に寄せて」と題して序文を書いている。公演の記録ほか時々の劇評などが掲載されている。